

令和元年6月7日現在

機関番号：82512

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K01906

研究課題名(和文) ラテンアメリカにおける農業企業の拡大

研究課題名(英文) Development of Agricultural Corporations in Latin America

研究代表者

清水 達也 (Shimizu, Tatsuya)

独立行政法人日本貿易振興機構アジア経済研究所・地域研究センターラテンアメリカ研究グループ・研究グループ長

研究者番号：00450510

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：ラテンアメリカでは近年、農業をめぐる土地、資本、労働力、技術などの生産要素市場や、農産物の市場が大きく変化している。このような変化に対応して、ブラジル中西部では大豆やトウモロコシなどの穀物を、ペルーでは青果物を大規模に生産する企業形態の農業経営体(農企業)が成長し、供給を増やしている。

これらの経営体は、生産そのものよりも、外部から有利な条件で生産要素を調達すること、その要素を結合して効率的に生産すること、そして農産物に付加価値をつけて販売することに強みを持っている。このような経営体の成長により、関連産業とともに農業がラテンアメリカの経済成長の原動力の1つとなっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

主に途上国における人口増加と経済成長に伴い、食料に対する需要はこれからますます増大するとみられている。これに対応する供給の担い手として期待されているのが、ラテンアメリカの農業生産者である。本研究は、ラテンアメリカにおいて穀物や青果物の生産・輸出を増やしている生産者をとりあげてその特徴を分析した。この研究から得られた知見は、安定した食料供給とその生産の担い手を育成するため方策を考える上での手がかりとなる。

研究成果の概要(英文)：In recent years, there are significant changes in the input and output market of agricultural products, as well as the technology used in their production, processing and distribution. Adapting these changes, large-scale cereal producers in Brazil and fruit & vegetable producers in Peru are increasing their supply to the international market. The competitive advantages of these producers are not in the production itself, but in the procurement of resources from outside market, the management of these resources, and marketing products with more value added. The emergence of these agricultural producers are one of the driving forces of economic development in Latin America.

研究分野：ラテンアメリカ地域研究 農業経営学

キーワード：ラテンアメリカ ペルー ブラジル 輸出青果物 穀物 農企業 大規模経営体

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

### 1. 研究開始当初の背景

農業・食料部門の需給においては、21世紀に入って大きな変化がみられる。まず需要面では、中国による輸入拡大をはじめとした国際市場における需要の増加である。食用はもちろん、飼料、工業用原料、バイオエネルギーなど、他の用途向け需要も増えている。加えて先進国のみならず新興国でも、生鮮の野菜や果物の需要が増えている。

供給面では、生産要素市場で変化が見られる。農地については、多くのラテンアメリカ諸国で1990年代以降に進行した経済自由化に伴い、農地に対する所有権の設定が進む一方で、これまで課せられていた大規模農地に対する所有制限の撤廃が進んだ。これにより、農地の売買や賃借が拡大した。また、点滴灌漑など新しい技術の普及によって、これまで農業ができなかった場所での生産が可能になっている。農業資材については、技術革新を背景として、ハイブリッド種子や遺伝子組み換え種子に代表される知識集約的な投入財の重要性が増しており、これらを利用した農業生産の標準化が進んでいる。農業生産に必要な資本についても、資本市場の発達により、これまでと比べて幅広い方法での調達が広がっている。

このような需給両面の変化を受けて、ラテンアメリカでは企業形態の農業生産者（農企業）による生産への参入が増えつつある。伝統的な生産者は主に自らの所有する生産要素を利用して生産活動を行う。これに対して農業企業は、資本市場から資金を調達し、農地、種子・肥料・農薬などの農業資材、農作業サービス、栽培管理など、外部から調達した生産要素を組み合わせ、大規模に生産している。本研究ではこのような農企業を対象に研究を行う。

### 2. 研究の目的

主に途上国における人口増加と経済成長に伴い、食料に対する需要はこれからますます増大するとみられている。これに対応する供給の担い手として期待されているのが、ラテンアメリカの農業生産者である。本研究では、農業生産者の中でも企業形態をとり大規模に穀物や青果物の生産・輸出を手がけている農業経営体（農企業）を取り上げて、その背景や経営体としての特徴を分析する。

### 3. 研究の方法

本研究は以下のとおり調査、研究、成果普及を実施した。

(1) 先行研究の整理 農業経営体についての概念整理を行い、従来の生産者と農業企業の違いを明らかにした。また、主にラテンアメリカにおける近年の農業部門の変化、家族経営の構造に関して整理した。

(2) 数量的把握 農業センサスのデータなどを用いて、分析対象としたペルーやブラジルにおいて、農業生産や農業経営体の規模の変化について把握した。

(3) 現地調査 年次報告書やウェブサイトの公開情報などにより分析対象となる農業企業を特定した上で、平成28年と29年度にブラジルで、平成30年にペルーで調査票に基づいたインタビューを実施した。

(4) 分析結果の報告 アジア経済研究所内での研究会や、ラテン・アメリカ政経学会などの学会において分析結果を報告し、その妥当性などについて議論した。

(3) 成果の普及 研究成果をアジア経済研究所の研究双書として出版したほか、一般向けに要約した記事などを同研究所の『アジア研ワールドトレンド』や『ラテンアメリカ・レポート』などに発表した。また、アジア経済研究所専門講座で出版物の内容を一般向けに話した。

### 4. 研究成果

本研究の対象として、ペルーの青果物生産・輸出企業とブラジルの大規模穀物生産者を取り上げた。それぞれの研究成果を簡潔に示す。

#### (1) ペルーの青果物生産・輸出企業

ペルーでは1980年代末から生鮮輸出处のアスパラガス栽培が始まり、2000年代には輸出が大きく増加した。2000年代末から2010年代にかけては、これにアボカド、ブドウ、ブルーベリーなどが加わるなど輸出製品の多様化が進んだ。生産から輸出までの関連産業を含む青果物輸出産業は、国内でも急成長している部門で、近年のペルーの安定した経済成長を担う部門となっている。本研究では、青果物輸出産業の中で農企業がどのように成長したのかを分析した。

農企業が成長した要因としてあげられるのが、垂直的統合と水平的多様化である。

垂直的統合については、個人の生産者に比べて大きな経営資源を有する農企業が、生産から輸出までのバリューチェーンを垂直的に統合することで、青果物の国際市場への輸出が可能になった。加工品と異なり青果物は、市場国の小売店に並ぶまで鮮度や品質を保つ必要がある。また輸出にあたっては、食品としての安全性や植物検疫において問題がないことを示す必要がある。農企業が自ら所有する大規模な圃場で生産し、隣接する加工場で洗浄・分類・包装・冷蔵保存・出荷することで、品質や安全性を保ち、トレーサビリティを確保することができるようになった。

そしてアスパラガス輸出で成長した農企業は、輸出作物の多様化（水平的多様化）を行うことで、農業生産や農産品の販売において企業が直面する問題を解決することができた。具体的には、農業の季節性や農業生産と農産物市場の不確実性といった問題である。

農業の季節性については、収穫期の異なる複数の作物を組み合わせることで、雇用の安定性を図り、農業機械や加工施設の稼働率を、年間を通じて高く保つことが可能になった。また、複数の作物を、異なる時期に複数の市場に売ることによって、不作や価格下落など生産や市場の変動による悪影響を和らげることが可能になった。

## (2) ブラジルの大規模穀物生産者

中国をはじめとする新興国における食料需要の増加にともない、1990年代以降に南米南部諸国による大豆やトウモロコシの生産が増加している。中でも大きく増えたのが、ブラジル中西部に位置するセラード地域である。サバンナに似た植生を持つこの地域は、以前は農業には適さないとみられ、ほとんど利用されていなかった。しかし土壌改良によって耕作ができることがわかり、1980年代以降に開拓が進められた。そして国際市場における穀物需要の増加に対応して生産が増え、現在は国内最大の穀物産地となっている。

セラード地域で穀物生産を担っているのが、1000ヘクタールを越える経営規模を持つ農業経営体である。家族と常雇用の従業員が大型の機械を用いて農作業を行うほか、収穫などの農繁期には季節雇用の労働者を雇うのが一般的である。本研究では、この地域では比較的小規模である数百ヘクタールまでの経営体と、それを越えて数千ヘクタールを経営する中規模以上の経営体を比較し、農業経営においてどのような違いがあるかを分析した。

2つの経営体間で異なっていたのが資金調達の方法である。ブラジルの農業経営体は一般に、収穫物を担保として資材販売店から種、肥料、農薬を調達する「バーター契約」を利用することが多い。バーター契約により、経営体は比較的容易に資材を調達できる反面、高い金利を負担することになる。また、バーター契約を利用すると、収穫した穀物は契約に指定された時期・方法で納入する必要がある。

そのほかの資金調達の手段として、政府や商業銀行などから比較的低金利の融資を受けることもできる。ただし、土地の権利証や会計書類の提出を求められるほか、手続きには時間がかかるため、必要な時に必要な資材を調達できないことがある。しかしこの方法で資金を調達すると、経営体は自由に穀物を販売することができる。価格の変動に備えて事前に先物で販売する、複数の業者の価格を比較して条件の良いところに販売する、収穫直後の価格が安い時期を避けてから地元の飼料工場に販売する、など、さまざまな選択肢から選ぶことができる。

経営体への聞き取り調査の結果、小規模の経営体は一般に、バーター契約を利用することが多く、規模拡大のための利益を確保することが難しかった。これに対して中規模以上の経営体は、政府や商業銀行などからの融資を利用していた。そのため、販売に際して裁量を発揮して、さまざまな形で利益を確保し、規模拡大につなげることができた。

以上より、穀物生産のように種・肥料・農薬などがパッケージで調達できるような技術の標準化が進んだ農業生産においては、農業生産そのものよりも、外部からの資源調達や農産物の販売に、十分な経営資源を配置して裁量を発揮することが、経営体の成長につながっていることが明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計2件）

清水達也「ブラジル中西部の大規模農業経営体の姿を求めて」（現地調査報告）『ラテンアメリカ・レポート』、査読無し、第35巻第2号、2019年、84-94ページ  
[https://doi.org/10.24765/latinamericareport.35.2\\_84](https://doi.org/10.24765/latinamericareport.35.2_84)

清水達也「ブラジル／中西部における大規模穀類生産の拡大」『アジア研ワールドトレンド』査読無し、264巻、2017年、16-17ページ  
<http://hdl.handle.net/2344/00049455>

〔学会発表〕（計7件）

Shimizu, Tatsuya, “Development of Fresh Fruit and Vegetable Export Industry in Peru” Latin American Studies Association 2019 Congress in Boston, May 2019

清水達也「ブラジル中西部における大規模農業経営体の拡大—家族経営と比較した経営管理の特徴—」ラテン・アメリカ学会第55回全国大会、2018年12月

清水達也「ブラジル中西部における穀類生産の拡大と経営の成長」日本ラテンアメリカ学会東日本研究部会（招待講演）、2018年4月

清水達也「ブラジル中西部の穀類生産における大規模経営体」ラテン・アメリカ政経学会関東部会、2017年7月

清水達也「新たな産業発展の可能性を示すラテンアメリカの農産物輸出」アジア経済研究所専門講座、2017年5月

Shimizu, Tatsuya, “Development of Fresh Fruit and Vegetable Export Industry in Peru” Kobe Seminar of East Asian network of Latin American Studies (EANLAS) at Kobe University, January 2017

清水達也「ペルーの生鮮果物・野菜輸出の拡大と植物検疫」ラテン・アメリカ政経学会、2015年11月

〔図書〕（計3件）

清水達也編『途上国における農業経営の変革』アジア経済研究所、2019年3月、241ページ

清水達也『ラテンアメリカの農業・食料部門の発展：バリューチェーンの統合』アジア経済研究所、2017年3月、200ページ

清水達也「ラテンアメリカにおける青果物のインテグレーションと輸出」佐藤和憲編『フードシステム革新のニューウェーブ』日本経済評論社、2016年3月、179-194ページ

〔その他〕

ホームページ等

アジア経済研究所 研究者の紹介ページ

[https://www.ide.go.jp/Japanese/Researchers/shimizu\\_tatsuya.html](https://www.ide.go.jp/Japanese/Researchers/shimizu_tatsuya.html)